

ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』翻訳後記
—あるいは虚構に倫理を見出しがたいこと

有 田 英 也

はじめに

ニューヨーク生まれのユダヤ系アメリカ人作家ジョナサン・リテルがフランス語で書いた小説 *Les Bienveillantes* は2006年にガリマール社から出版されるとただちに大きな反響を呼び、ふたつの文学賞を射止めた⁽¹⁾。本論の筆者はその日本語版『慈しみの女神たち』の四人の訳者のひとりである⁽²⁾。この小説は1941年6月22日の独ソ開戦から1944年4月末のベルリン市街戦までを、戦後まで生きのびた元ナチ将校の回想形式で語る。後述するように（「6 虚構に倫理を問う——結論に代えて」）、そこにアイスキュロスの<オレスティア>三部作が、小説表題に導かれて「母親殺し」のテーマを持ち込む⁽³⁾。語り手であり主人公である青年の、家族との葛藤の物語が、こうして神話で枠づけられる。本論の執筆にあたって、2013年9月13日に一橋大学で開催された国際シンポジウムでのフランス語による報告に加筆修正を施した⁽⁴⁾。

作者リテルを交えてパリ第七大学で開かれた討論会で、ジュリア・クリステヴァは、この小説には「慈しみの女神」が出て来ない、と言っている⁽⁵⁾。たしかに、ギリシア神話のオレステスのように、主人公マクシミリアン（作中ではおおむねマックス）・アウエはさながら復讐の女神エリーニュスのごとき二人組の刑事に、実母と義父を殺害した容疑で追い回される。のみならず、東部戦線でいわゆる「銃弾によるショアー」に投入されてから慢性的な吐き気と下痢に悩まされ、ハンガリーでのユダヤ人移送の特別行動の後は発熱と心神喪失、アウシュヴィッツ絶滅収容所の閉鎖にともなう「死の行進」の直後は、ベルリン空襲で鼓膜を痛める。主人公はみずからが犯した罪ゆえに、どこに行っても追われる身となった。ところが、彼に女神アテネの取り

なしはなく、戦後社会と和解するための手だてが小説に用意されているようには思えない。元ナチ将校の回想という形を取るこの小説で、読者が大いなる気づまりを感じるとすれば、それは取りなしが作品の中に書かれていないことである。大作の最終行には、「<慈しみの女神たち>はわたしの足跡を見てとってくれていた」とあるが、復讐の女神が慈しみの女神エウメニデス（そのフランス語訳が小説表題の«Bienveillantes»）に変わる経緯は書かれていない。

なぜ主人公は生きのびて語ることができたのだろうか。ユダヤ人大量殺人の現場で中心的役割を果たしたこの元ナチ将校アウエに、赦しを与える役割を期待されているのは、読み終えた私たち自身ではないだろうか。この小説を楽しんだ私たちひとりひとりが「慈しみの女神」になることを要請されていないだろうか。こう問えば気持ちは穏やかではない。少なくとも、このフランス小説を日本語で読んで面白いと言わせることを第一義として仕事に励んだ翻訳者には、気づまり以上のもの、一種の責任感があるだろう。

1 作者の紹介

翻訳チームは原作が話題になった2006年の暮れにできた。すぐに原著者から、この小説を書くのに参照した文献のリストがCD-ROMで届き、開けると地図と写真も入っていた。さらに驚いたことに、原著者は原文のドイツ語は訳さずそのまま訳文に残せ、と強く主張していた。たとえば、小説が後半にさしかかった「メヌエット」の章（1943年5月半ばから1945年2月初めの物語）で、主人公は親衛隊全国指導者の幕僚部に属し、強制収容所監察局および帝国保安本部と連絡を取りながら、戦時経済省の協力を得て任務

に当たる。ゴチック体にした厳めしい役所や地位はすべてドイツ語なので訳してはならない。主人公はこの時、親衛隊で国防軍の少佐に相当する階級にあったが、これもシュトゥルムバンフューラー (Sturmabführer) SS と書かねばならない。当初は、註も禁じられていた。原書にも註はなく、巻末に版元が用語解説と階級対照表を 10 ページほど付けただけである。この小説は注文の多い作者を持っており、翻訳中に参照した英訳は、作者の要求を全面的に受け入れたらしかった。

本論ではスパイ小説の第一人者ロバート・リテルの息子である作者の経歴については註に譲ることにする⁽⁶⁾。ナチス・ドイツによるヨーロッパのユダヤ人の大量殺人という重いテーマを、それも虐殺の官僚機構の側面に注目し、政治的意義も主人公に語らせながら、歴史と虚構とを混ぜ合わせるようにして書いた理由は、『慈しみの女神たち』刊行当初から批評家が知りたがったところである⁽⁷⁾。作者本人が、この小説を書いたきっかけを思わせぶりに話したこともあった⁽⁸⁾。

文学研究における「作者の介入 (intervention de l'auteur)」とは、物語の叙述に作者が直接、つまり読まれる文章の内部で、コメントをつけることであり、しばしば序文の形で書かれる自著解題とは区別される。スタンダールは書いている自分の状況を物語に割り込ませることで知られ、たとえば『エゴチスムの回想』第一章末尾に、「1832 年 6 月 20 日。18 ページ目へ来て、手が疲れる」とある。また、ルソーは書簡体小説『新エロイーズ』に大量の脚注をつけ、バルザックは、やはり書簡体小説『二人の若妻の手記』にナポレオン民法典を批判する註をつけた。後の 2 例では、書簡体小説に、編者に仮装した作者が介入している、と見ることもできる。『慈しみの女神たち』に、この意味における「作者の介入」は見当たらない。数十年を経ての回想とい

う形式を取っているため、現在の語り手が過去の自分の言動にコメントをつける部分に何かしらの介入が感じられるとしても、それは回想録というジャンルの要請によるものであり、また小説研究においては語り手の思想を作者の思想と混同することが厳に慎まれている。したがって本論で言う「作者の介入」は、原作者リテルが原著と翻訳の版元に対して、読者の理解に大きな障害となる制約を突きつけたことである。その制約とは、読者がこの小説で語られた「あるナチ親衛隊将校」の言動に倫理的判断を下す前に、まず「第三帝国の神殿」（ナチ党の公認建築家で軍需相アルベルト・シュペーアの回想の副題）で何が起きていたかを、相当の苦労をして知らねばならない、というゲームの規則に他ならない。読者は資料の山を掻き分けるようにして物語の大筋をたどる。

実際、小説冒頭の章「トッカータ」では、ホロコースト研究の古典と云うべきラウル・ヒルバークの『ヨーロッパのユダヤ人の破壊』が参照されている⁽⁹⁾。ゲシュタポの「ユダヤ課」の長として戦後、イスラエルで裁かれたアイヒマンの家庭を描く「メヌエット」の挿話では、ハンナ・アーレントが『エルサレムのアイヒマン』（1963）で使って大きな反響を呼んだ「凡庸な悪」という表現が引かれている⁽¹⁰⁾。ところが、両者の著書とは異なり、ナチが絶滅収容所の用務員として使役したユダヤ人被拘留者、いわゆるカポ（Kapo）は、資料を元に実在を論証されるのではなく、主人公アウエが収容所の「視察」中に発見した物語内部の事実である。アーレントがナチとの一種の共犯関係を暴いたためにユダヤ人コミュニティからの激しいバッシングを招いたユダヤ人評議会については、ハンガリーでアイヒマンとともにユダヤ人の強制移送に携わった主人公が見た「ユダヤ課」の策略と、それを出し抜くユダヤ人有力者の戦略として物語られる。このように、『慈しみの女神

たち』という小説は、歴史的事実を確定する作業と、架空の元ナチ将校が自分の行動を回想して言葉に秩序づける作業とが、纏れあって進行する。ドイツ語表記は、今はフランスで暮らしているとされるこの将校にとって、第三帝国末期の「現実」の肌触りそのものなのであろう。この架空の「現実」を俯瞰する垂直的視座がどこにもないために、読み終わった読者には、「＜慈しみの女神たち＞がわたしの足跡を見てとってくれていた」（訳書（下）p.406）ことをどこで見落としたのか納得がゆかない。

この批評家と歴史家への挑戦とも取れる書き方が、作者リテルにとって高くついたのであろうことは想像できる。研究者は、リテルのドイツ語の誤りを見逃さなかった⁽¹¹⁾。そのため、2007年暮に出たフォリオ版は、表紙に「著者による改訂版」（*édition revue par l'auteur*）と明記しており、読み直すとしたしかに表現がすこし変わっている。たとえば、ユダヤ人絶滅は総統ヒトラーの命令であるという記述は、史実に反するとして、作者の間違ったドイツ語の造語「総統による絶滅命令」（訳書（上）p.109）とともに指摘されていた。リテルの造語フューラーフェアニヒトウングスベツフェールでは「総統を絶命させる命令」の意となるのだが、リテルは造語の部分だけを直して、記述自体は変えていない。つまり、小説前半の「アルマンドⅠ、Ⅱ」で、主人公は占領地のユダヤ人を、非戦闘員であるなしに拘らず、男も女も、子どもも老人も皆殺しにする決定が、ナチス・ドイツの最上層部で、遅くとも1941年夏になされた、と聞かされる。憐憫と恐怖を悪しき感情として退ける人間でなくては、あるいはニーチェが考えたような超人でなくては、ソ連軍の抵抗で新しい段階に入った戦争を戦えないからである。事実、小説には、ユダヤ人殺害のために心身の健康を害し、味方に発砲して療養を余儀なくされた士官が登場する。その彼が部隊に戻るや、「総統による絶滅命令」を盾に、

親衛隊員も処刑にあたれ、と檄を飛ばすのだった。彼は実在の人物で、1951年に刑死したパウル・ブローベルである。

ジョナサン・リテルは、ホロコーストが東部戦線の膠着とソ連軍の反撃によって引き起こされた、ナチス・ドイツにとっては想定外の事態だとするエルンスト・ノルテのファシズム観を、小説によって広めようとしているわけではない。この歴史家論争と深く関わる見解は、次のように作中の人物、たとえば主人公の分身のごときトーマス・ハウザーによって1941年秋の時点に言明された。トーマスは主人公マックスと同様、SD（親衛隊保安課報部）で働く架空の人物である。ただし、彼は主人公よりも意欲的で、占領地ウクライナで協力者（Hivi ヒーヴィー）を募ろうとしており、国防軍総司令部の対外防諜部と対抗していた。国防軍が占領地で協力者としたのは、ウクライナ民族主義者で、ナイチンゲールの徽章を付けた特殊部隊ナハティガルである。そこで、トーマスはスターリン時代のソ連が「ユダヤ人たちに支えられてウクライナ農民を搾取」したという仮説にもとづき、反ユダヤ感情を刺激することで「住民を心理的に巻き込」もうとしたのである（訳書（上）pp.69-73）。だが、ユダヤ人迫害は占領統治の手段から逸脱して自己目的化し、SP（保安警察）が逮捕したソ連の内務人民委員を含む400人ものユダヤ人は、民衆によるリンチの後で処刑されてしまう（同99-100）。その時トーマスは主人公に、（処刑がよく見える）「席でも売ればよかったな。そうすれば金持ちになれるのに」とふざけて、国防軍総司令部ではそれを「エクセクツィオン＝トゥーリスムス（処刑観光）と呼んでいる」とせせら笑う。東部占領地の拡大が道徳的弛緩をもたらしたのか、それとも戦争それ自体が道徳の欠如であるのか、いずれにせよこの小説は冒頭で語り手が「いったいどういうことであったのかひとつ話をさせてくれたまえ」（同p.12）と述べたよう

に、善悪の判断の前に、まず事実を伝えようとする。

トーマスは政策を察知して機敏に動こうとする野心家だが、政策決定に関わってはいない。ユダヤ人問題の最終解決、つまり抹殺を意味するエントレズングへの言及は、すべてが終わった時点からの回想「トッカータ」（訳書（上）p.23）では名指しされるが、戦時中の主人公がそれを知るのは、1943年5月、上述の「総統命令」と矛盾するヒムラーの側近プラント中佐の言葉に当惑したのが契機である。すなわち「強制収容所システムの目的は、純然たる懲罰から労働力供給へと、すでに一年以上も前に変更されている」（訳書（下）p.13）というプラントの説明に、マックスは違和感を覚える。そこで、ゲシュタポにいて事情通のトーマスから、「エントレズングそのものは《総統》じきじきの命令なので誰もそれ自体を批判できない」（同p.23）が、収容所の潜在的労働力をSSと軍需省が奪い合っている複雑な構図について教わる。この小説を通してトーマスはマックスの知恵袋であり、出世のライヴァルである。

だが、それは東部戦線の形勢が逆転しかけた時点での会話であり、小説前半の独ソ戦が始まって数ヶ月の段階で、主人公ら若い親衛隊員は、なぜ武器を持たないユダヤ人まで皆殺しにするのか納得がゆかない。ブローベルが主人公たちの部署に伝えた「総統による絶滅命令」（同pp.105-6）の意味は、後世が移動殺戮部隊と呼んだ特別出動集団（アインザッツグルッペ）に配置された主人公が、あれこれ考えながら推測してゆく。いわく、「ブローベルはそれほど知的な男ではなかった。こうしたきわめて強力な決まり文句は、あきらかに彼自身が思いついたものではないだろう」（同p.107）。この時点ではトーマスも、主人公に「総統命令」の真意を尋ねられると、「俺はこれがいい解決法だなんて思っていない。戦争のおかげで緊急にひねり出された

答えなんだ」(同 p.110) と言い逃れる。さらに、他人事のように、「連中の工業生産力を見誤っていたことは明らかさ」(同) と論評する。主人公はもっぱら情報収集して報告書を作るのが役目だが、すでに処刑にも立ち会っていた。「戦地からは《分遣隊指導者》たちが報告を送ってきたが、それは隊の士気について非常に否定的なものだった。——あちこちで神経衰弱が見られ、兵士たちが泣いていた」(同 p.111)。主人公自身、精神の安定を欠いて、1942年2月、二ヶ月の休暇命令を下されクミア半島で療養し、自分たちがしてきたことを外から観照的に眺めることになる⁽¹²⁾。

このように、主人公がユダヤ人を抹殺することの意味を探しあぐねるプロセスで、わたしたち読者は戦後の論争に見出だされる論拠のいくつかを読む。それは物語の都合であって、作者が小説に介入して読者を誘導したからではない。もちろん、すべてのユダヤ人の抹殺という途方もない命令が回想の冒頭で現れる時に、後述するように(「5 人間の兄弟たちのひとりとして」) 作者は、この実在の人物が数百人も登場する大作にあって、ふたりの架空の人物、マックスとトーマスに、自分で考えて、その考えを表明する、という大切な役割を振っている。だから、彼らに感情移入して小説を読み続けることができるかどうかで読みの経験は大きく異なるだろう⁽¹³⁾。

2 2011年の読者の位置

本論の筆者は、2011年3月1日、印刷所に最終ゲラを送った。東日本大震災が起きたのは、その10日後である。『慈しみの女神たち』日本語版の読者は、震災と津波という恐るべきカストロフを経験していた。それは第二次世界大戦を描いたこの小説に、どのような解釈をもたらすだろうか。たと

えば、1943年5月以降を物語る後半の「メヌエット」には、ベルリン大空襲の記述がある。親衛隊将校と民間人とで、カタストロフへの対処の差は際立っている。実在の人物アルベルト・シュペーアと民間人も同様である。取り乱す一般市民を尻目に、主人公は平然と防空壕（Bunker）に降り、黙々と消火作業にいそしむ。部下を気遣い、病院など公共施設の被害状況をベルリン市民のために調べあげる。一方、ナチス・ドイツの公認建築家で、当時は軍需相の要職にあったシュペーアは、官庁の個室が直撃弾で吹っ飛んでも陽気である。なぜなら、もし爆撃がルール地方の工業地帯だったら、部品不足で戦争が継続できないからである。「奴らは人を殺し、わが国の文化施設に物資を浪費する」と言って、「ざらついた笑いを漏らし」、主人公にこう言い切る。「いずれにせよ、全部作り直すところだったがな、ハッ」（訳書（下）p.165）。シュペーアは能吏であろうし、ヒトラーからベルリン改造を任された野心的な建築家かもしれない。だが、主人公は能力を言う前に、好感の持てる人物である。

その一方で、マックスは変わり果てた市街を淡々と描写する。特に、数十万人のユダヤ人を移送したハンガリーから1944年7月初めに帰国して、爆風で窓ガラスのなくなった下宿から街を見下ろし、タバコをくゆらせながら酒を飲む主人公には、民間人とは著しく異なる凄みがある。これには登場人物の造型がかかわっている。前述のように、主人公ら親衛隊の保安課報部の将校たちは、東部占領地でユダヤ人を無差別に殺害するうちに、殺人に慣れてしまっていた。だが、マックスだけは上司のように転属を願うこともせず、「好奇心を抱いており、こうしたことすべてがわたしにどんな効果を及ぼすのか見ようとしていた」と、「愕然としながら気づいた」のだった（訳書（上）p.113）。戦争は自然災害ではなく、殺人は遺体の回収とはまったく異なるに

もかかわらず、『慈しみの女神たち』の描くカタストロフが一部の登場人物を傍観者にしてしまうのは、彼らが自己への関心を強く持っているからである。この内省的傾向が外界の事象に対して観照的な態度を可能にし、それが戦時であって物に動じない気力を感じさせもする。このような主人公に、読者が感情移入したらどうだろう。そこに書かれていることすべてが自分にどんな効果を及ぼすのか見ようとする者は、自己への関心を描かれた事態の判断よりも優先させている。読者の場合、それは自己に対して観察者であるというより、むしろ自己の興奮状態を楽しむという点で、エンターテインメント作品の読者に似るだろう。リテルの小説への批判のひとつに、ホロコーストを知的好奇心の対象にしている、というものがある

映画『ショアー』の監督クロード・ランズマンは、「不健康な感情移入の現象」⁽¹⁴⁾という言葉で、『慈しみの女神たち』の怖さを語っている。被害者のうちの生存者を証人として、彼らの見た死者および死を生み出す機構を描きだすこと、それがランズマン監督の目論見だったとすれば、この小説の企てとは、元ナチ将校という虚構の加害者を視点とし、虚構のユダヤ人大量殺人を、数多くの歴史上の人物と、スターリングラード攻防戦やベルリン大空襲など歴史上の事件とともに年代記として物語ることにあった。ランズマンの言う「不健康」は、作者リテルの作りだした視点でショアーを見ること、ショアーを見た気になることにある。

たしかに、歴史小説、特に20世紀の架空戦記に見られるように、虚構の他者の目で歴史的事象を見れば、それなりに面白いだろう。そして、感情移入した他者の言葉に感情を揺さぶられながら、読者が事実について自分で考えることを放棄してしまうなら、おぞましさに魅了されつつ、そうとは気づかないかもしれない。しかし、『慈しみの女神たち』では、歴史的事象を見

る視点となる登場人物の心理的葛藤まで書きこまれており、この視点はけっして客観性を擬した透明性を帯びていない。たしかに、小説中のナチ将校たちは、現在進行中の事態に対して超然とすべく命じられ、行為に及びながら批判力を弛緩させてゆくのがありありと読める。だが、これに対して主人公は、ウクライナでのユダヤ人虐殺以来、見ることに起因する吐き気に悩まされながら任務を放棄せず、やがて強制収容所という彼の吐き気の根源にみずから進んで近づいてゆくのである。

主人公のナチ将校は、少なくとも現代の日本人のものとは異なる歴史状況によって、ナチス・ドイツのイデオロギーを受け入れていた。それを要約するなら、「至高の価値がフォルク、すなわち自分が所属している民族であり、このフォルクの意志がひとりの首領に体现されているのなら、たしかにフューラーヴォルテ・ハーベン・ゲゼツェスクラフト〔総統の意志は法的効力を有す〕である」（訳書（上）p.108）。だが、主人公は付け加えて、「しかし、それでもなお、《総統》の命令の必然性をおのれのなかで理解することはきわめて重要だ」とも言う。彼は第三帝国のイデオロギーを批判できたかもしれない人物である。だからこそ、リテル作品の評価には微妙なものがある。

ここで「視点」という視覚にちなんだ比喻に、ふたつの論点が含まれることを思い出しておくのは無駄ではあるまい。まず、「視点」が防犯カメラのような機械であれば、何を見るかを決めるのは機械の「判断」ではなく、「設定」であり「性能」である。前述の「客観性を擬した透明性」とは、「命令だからこれこれの事をした」「見たことに異を唱える自由はなかった」と述べることで自分の責任を封印し、あたかも主体的人間がそこに居なかったかのような「透明性」を当事者に持たせようとする方便である。もちろん、戦

後にエルサレムで裁かれたアイヒマンは、この主張を法廷で認めさせることはできなかった。だが、小説の語り手は巻頭において、「わたしはベフェールスノトシュタント (Befehlsnotstand)、つまりわれらがドイツの優れた弁護士たちがとても高く評価する命令による拘束ということを正当だと主張したりはしない」(訳書(上) p.27)と、非常時を言い訳にしないことを高らかに宣言していた。戦後の裁判においてさえ同様である。「こうやってしまえば簡単だったはずだ(中略)わたしの仲間アイヒマンがエルサレムで、素朴な男たちのこの上なく直接的な簡潔さでもって、かくも見事に言っただけのように、<後悔なんて子供のすることです>と」(訳書(下) p.134)。このように、語り手マックス老人は、主人公の若いマックスが意に染むまま見たと知って悦ぶが、見たこと責任逃れをするのは潔しとしない。

次に、「視点」が生身の人間でも、見たものをあたかも死者による観察であるかのように提示する方法がある。「墓の彼方の回想」、あるいは本論で「年代記」と呼ぶものがそれである。前者はフランス・ロマン主義の作家シャトブリアンが回想録の表題とした。彼は友人に、この回想録の話者の声が、すでに俗世への関心を捨てた特別な話者による物語という意味で、まるで墓から聞こえるよう希望している。後者は、語られた内容を、たとえそれが現代の事象であっても、いっさいの世俗的な利害判断を抜きに、数百年前の出来事のように時を超えて物語る手法である。戦後に敗者の側から、公的な歴史観に反駁しつつ歴史を叙述するさいに、死に臨んで真実を語るかの「墓の彼方の回想」型、あるいは事件としての切迫さが失われた人類史からする達観した「年代記」型の叙述が見られることは否めない。

小説家ルイ＝フェルディナン・セリーヌは、デンマークで収監された後に恩赦され、帰国して発表した『城から城』に始まるドイツ三部作で、「年代

記作者」としての位置づけを読者に求めた。眼を背けたくなるものまでも好奇心を失わずに観察し、すべてを読者に見せることに徹するなら、書き終えた時点ですでに罪が浄化されている、という含みが年代記にある。ならば、リテルの小説が虚構の回想録の形を取り、しかも「＜慈しみの女神たち＞はわたしの足跡を見てとってくれていた」と掉尾にあるのは、語り手である元ナチ将校が年代記作家になりたがっている証しだろうか。もしそれが元ナチ将校の初めからの意図であるなら、そしてわたしたち読者が「慈しみの女神」たるべく要請されているのなら、これはかぎりなくスキャンダラスな企てである。スキャンダルの構造を明らかにするために、アウシュヴィッツ収容所司令ルドルフ・ヘスの描き方を、実在の彼自身による回想、リテルの小説における一人称話者の回想、ヘスをモデルとした一人称小説の叙述で比べてみよう。

3 ルドルフ・ヘスの三通りの描き方

フランスの作家ロベール・メルルは、戦後間もなく、まだアイヒマンが潜伏していた時代に、ホロコーストを主題とする小説『死はわたしの職業』(1952)を発表した⁽¹⁵⁾。リテルの小説と同様に一人称で語られているこの小説で、主人公ルドルフ・ランゲが、『慈しみの女神たち』にも登場するアウシュヴィッツ収容所司令ルドルフ・ヘスであることは、作者が再版に付した序文で明らかにしている。もっとも、SS 全国指導者ヒムラーからアウシュヴィッツの司令を任された人物は、たとえ変名でも誰のことか一目瞭然だろう。なぜなら、ヘスは獄中で大部の回想録を書いたからである⁽¹⁶⁾。

この回想録は、メルルもリテルも利用しているが、実在のヘスが自己正当

化のためにこれを書いたことは、ユダヤ人虐殺が上層部の決定にもとづいていると主張する次の一節からよく分かる。「ヒムラーは、一九四一年、最初のユダヤ人抹殺命令を発し、全ユダヤ人はそれにもとづいて抹殺さるべしと命じたが、やがて、それを、作業能力ある者は軍需産業のために選別さるべし、と変更した」(p.267)。つまり、最初の「命令」は、「このユダヤ人虐殺は、ドイツを、われわれの子孫を手強い敵から永遠に解放するために必要なのだ」(p.307)という人種間戦争の考えに立脚しており、大量虐殺を嫌がる収容所関係者を説き伏せるために必要だった。だが、戦局の悪化によって被拘留者の適切な労働配置という新しい課題ができた。その結果、ヘスの仕事はたんに被拘留者を受け入れて「抹殺」するだけではなくなった。労働に適していなければ、また働く場所がなければ、もはや収容所は無駄な食事と宿舎を被拘留者に与えられない。その辛い思いを、回想録のヘスは、「一九四二年春のこと、今を盛りの若者たちが、農家の中庭に咲き乱れる果樹の下で、大方はそれと知らずに、ガス室に向かって、死へと歩いていった」(p.302)と、淡々と回想する。その光景を「悲痛」と感じる自分が居たという、自分だけが知るヘスという人物の真実を、彼はクラカウ（クラクフ）の拘置所で手記を書き終えながら、刑死の後に後世の読者に届けるつもりでいる。「墓の彼方の回想」型の叙述は、世人は「決して理解しないだろう。その男もまた、心をもつ一人の人間だったこと、彼もまた、悪人ではなかったことを」(p.376)という一節を特徴とする。

『慈しみの女神たち』の冒頭をもじって言うなら、ヘスもまた「人間らしい兄弟 (Frères humains)」だと印象づけたいわけである。興味深いことに、『慈しみの女神たち』の主人公であるナチ将校は、まさしくSS全国指導者ヒムラーから、占領地のユダヤ人被拘留者のうち作業能力のある者を軍需産

業のために選別すべく、つまり「変更」されたヒムラーの命令に即して、直属の作業員に任じられた。一方、リテルの小説におけるヘスは、この法学博士の眼に、頑迷で冷酷で、自分が管理するガス殺の装置を自慢する愚か者にすぎない。回想録のヘスが帝国上層部の政策転換を受けて試みたものの完遂できなかった事業を、リテルは架空の人物に担わせる。そして、周囲の頑迷で冷酷で、保身に長けた収容所やユダヤ人移送の関係者たちの妨害によって、やはり挫折させるのである。

メルルの小説では、独ソ開戦後数ヶ月の時点で、すでにアウシュヴィッツ収容所司令だったヘスをヒムラーがベルリンに呼びつけ、ヒトラーの命令を口頭で伝える。その命令とは政策転換前の絶滅の任務であった。

「フューラー [総統] は」と彼は明言した。「ヨーロッパにおけるユダヤ人問題の最終解決を命じられた」。

彼はややあつて付け加えた。

「この職務を遂行するために貴官が選ばれた」。 (中略)

「フューラーは、もし我々が今、ユダヤ人を絶滅させないなら、彼らはやがてドイツ民族を絶滅させる、とお考えだ。だから、問題はこう問われるのだ。連中か、それとも我々か、と」 (pp.242-3)。

このように、メルルの小説はヘスの回想録に反して、収容所司令のユダヤ人絶滅政策に対する責任を明らかにする。『慈しみの女神たち』のヒムラーは、主人公がスターリングラードで負傷するまで会ったことがないので、独ソ開戦後の1941年秋に、ほぼ同じ内容を聞いたのは、前述の東部戦線で大量虐殺による精神障害から立ち直ったプローベル大佐を通してである。主人

公によればそう知的でないブローベルの長広舌によって、彼が鵜呑みにした「総統命令」の存在が間接的に裏付けられた。そして、このナチ将校は「好奇心」から東部占領地の殺戮現場にとどまり、その後はヒトラーの「総統命令」を変更したヒムラーの懐刀となるのである。メルルもリテルも、回想記のヘスが1942年春に抱いたような沈痛な感動を、主人公に経験させない。収容所司令も「ライヒスフューラーSS特別代表」（訳書（下）p.185）も、心ならずもそこに居て目撃者となったのではないからである。この人物設定の意味は小さくない。

フランス語で«bourreau»という「殺人者」本人が、犯罪に手を染めることに精神的葛藤を抱き、いわば心のなかで対話を行い、犯行の動機を確実にしてはじめて、彼の物語に倫理的契機がもたらされる。ただし、この契機が安物の涙に結果すれば、実在のヘスが獄中で語った「悲痛」のようなカタルシスに行きつくだろう。ところが、メルルの描くルドルフは、敢然と、粘り強く仕事に励んで感傷に溺れない。リテルの描くマックスもまた、自尊心と趣味の高みからユダヤ人被拘留者を眺めるので、たまたま移送直後のユダヤ女性に親切にすることはあっても、同情はない。

たしかに、実在のヘスもまた、獄中で回顧的展望のもとに人生を正当化して、たとえば戦前の共産主義者との闘いから一貫した、ナチ党员として十分誇れる仕事が、強制収容所の管理・運営であった、と語ってはいる。その意味で実在のヘスの獄中手記は、確信犯による潔い回想でありえたかもしれない。だが、すでに善悪の彼岸にいると思いきんだのだろうか、世人に理解されなくても「心をもつ一人の人間」であるところを見せようと麗しき魂を偽装してしまった。

現代の大量死をこのような「回想記」のモードで語る者は、倫理的判断の

契機を歴史なり後世の読者に譲ったふりをして、大量殺人の実行犯を裁こうとする同時代の読者からみずからを隔離している。強い情動が得られそうな悲惨な場面を、相手（ここではガス室に導かれるユダヤ人）から見返されずに語るのは、それが自己陶酔的なカタルシスであるからというより、たんなる「覗き趣味」という意味でスキャンダラスである。

そこでメルルは、その経歴に苦勞人らしいところもある実在のヘスの精神的葛藤を表すために、彼の人生の画期ごとに、その時点を生きる「わたし」の視点から物語を描いた。画期のそれぞれで主人公は、たとえば自分を軽蔑する父親との闘い、夫婦で住みこんだ農場での排水溝の掘削など、異なった問題を抱える。小説のヘスは、収容所司令となっても、クレマトリウムで死体を焼いていたことを家族に隠していたので、気づいた妻から激しくなじられる。だが、戦後に潜伏していた家に踏み込まれると、大切にしていたSSの黒い制服に着替えて現れたことから、職務を恥じていたわけでないことが知られる。ヒムラーから口頭で伝えられたヒトラーの命令を、身震いして聞いた自分が、以後の彼の原点であり、行動の軸だからである。このように、メルルは自己正当化の回想録をしたためのヘスを捨象することで、虚構の収容所司令の物語を作った。

しかし、虚構に倫理を持ちこむのに必要な「他者」との対話は、『死はわたしの職業』のヘスが逆境に弱音を吐かず、アイヒマンのような虚栄心に動かされるタイプではないことによって妨げられている。例外は、前述の取り乱した妻の叱責と、敗戦後、すべての責任を負ってくれると信じていたハインリヒ・ヒムラーの服毒自殺を知ってこみあげた激しい怒りしかない。それさえ暴風に耐えるように過ぎてゆく。小説のヘスは罪を認めもしなければ、涙を流してカタルシスを得ることもない。だから、成長も更生もない。それ

では、『慈しみの女神たち』で、実在の収容所司令が果たすべきだった、被拘留者の生産力の徹底活用という新しい任務を担ったナチ将校マックス・アウエは、物語を通じて成長し、ドイツの敗北にさいしてカタルシスを経験するのだろうか。

4 合わせ鏡のヘスとマックス

リテルの『慈しみの女神たち』のヘスは饒舌である。視察に来た主人公に拡張計画を説明しようと頑張る。かつて農園を経営したヘスにとって、今では収容所が自分の生み出す価値のすべてであるから、家族を司令宿舎に住ませ、入所したユダヤ人から奪った余所行きの服を子どもに着せる。被拘留者の所持品を管理するカナダと呼ばれる部署の所員たちは、破れやすく困るところへヘス夫人に、女性の被拘留者から奪った下着をプレゼントして司令に取り入ろうとする。司令宿舎で開かれたパーティーで、主人公は、すでに死体を焼かれた女性のものであった「レースのパンティーに巣ごもりしている」ヘス夫人の性器を想像する。ここは『慈しみの女神たち』の批判者がよく取りあげる、慎みを欠いた性的描写のひとつである（訳書（下）pp.89-90）。だが、これは読者の気を引くためというより、むしろ同様の表現が、1944年7月、高熱にうなされながら、「カッシュウヤムンカチのぬかるみに旅行鞆を置いて座っていた若い妊婦たちの姿が目につかび、わたしは膨らんだ腹の下で両脚のあいだに慎ましく巣ごもりする彼女らの性器を思った」（同p.252）時に現れることから、このナチ将校にあっては、母性への嫌悪感がユダヤ人虐殺を背景化し、記憶において遮蔽しているのである。ともあれ主人公の報告によって更迭されたヘスは、1944年のハンガリー作戦のさい

には収容所司令に返り咲いており、出張した主人公が彼の職業、つまりユダヤ人殺害に背くと知って、冷たくあしらう。このように両者は、ひとつの事業において対立しているが、ヘスを観察しているマックスに、相手がユダヤ人問題の最終解決に携わる自分の姿でもあるとの自覚はない。

ヘスはアフターファイブが描かれているという点で、『慈しみの女神たち』における実行犯たちの典型である。ゲシュタポの「ユダヤ課」のボス、アドルフ・アイヒマンは、自宅で開いたパーティーで、みずからヴァイオリンを弾き、カントについて大学出の主人公に卑屈に尋ね、客を自室に引っ張ると、蜂起したユダヤ人を皆殺しにしたワルシャワゲットーの豪華な報告集を得々と見せる。その彼も、主人公が彼の職業つまりユダヤ人殺害に背くと知ると、あらゆる手段を使って邪魔をする。アイヒマンとマックス・アウエは、1944年のハンガリー作戦の終幕で、合わせ鏡のように対峙する。

主人公が7月初めにベルリンに戻る前に、「ユダヤ課」のボスを事務所に訪ねると、「ハンガリーはわたしの傑作だ」（訳書（下）p.240）と悦に入ったアイヒマンは、「それで俺は、結局どうなんだ？俺はどうなる？家族はどうなるんだ？」と突然、取り乱して尋ねる。マックス・アウエがSDの知人を介して連合軍のラジオ放送に通じていると思ったからである。アイヒマンは、「わたしたちには意見の相違があるが、それでもご存知だろう、わたしが貴官の意見を尊重してきたことを」（同p.241）と付け加える。ここで主人公が戦争に負ける場合と負けなかった場合のそれぞれについて相手に告げたことは、そのまま彼にも当てはまるはずだが、主人公に迷いも狼狽もない。ただ、前述のように、ベルリンに戻って発熱し、女友達ヘレーネに介抱されながら生死の境をさまようだけである。主人公は人事不省のあいだ宇宙人が巨大植物を地上に繁茂させる悪夢に捉えられるばかりか、収容所では女も子

どもも皆殺しにしている、という収容所の近傍では周知の事実となった機密を彼女に漏らしてしまう。「お前の旦那は殺人犯だった、俺は殺人犯、そしてお前は殺人犯の共犯だ、俺たちの労苦の果実を食べているのだから」(同 p.255)。

だが、回復した主人公は、非礼を詫びるだけで、相手の「悲しいことね。あなたが気の毒だわ」という労りの意味を理解せず、「たとえわたしたちが負けなくても、わたしたちは支払うことになるでしょう。支払わねばならないわ」(同 p.257) というヘレーネの悔悟を促す言葉を、アイヒマンのように、つまり戦勝国からの追求としか理解しようとしないう。作者は主人公にカタルシスと罪の償いの機会をかいま見せながら、それを取り上げている。マックスはアイヒマンの苦悩に、自分のそれを見なかった。なぜなら、主人公のようなナチ将校は、本来、民間人とは違う形で機構に取り込まれているはずだからである。

アイヒマンの上司ミュラーは、主人公たちを自宅に招いて平服でもてなし、チェスの腕前を見せつける。非番の保安課報部 (SD) の将校たちは、ナチス・ドイツの戦争機械のなかで、よく使いこまれた道具のように、一種の機能美さえ示す。軍需相アルベルト・シュペーアとて例外ではない。週末の一泊旅行で狩りを楽しむ大臣は、同じ組の主人公に板チョコを勧め、獲物の羽毛の美しさを語った末に、秘密兵器 V 1 号の地下基地を訪問する段取りについて相談をもちかける。彼らが繰り広げる鏡の間の群舞から、誰ひとり逃れられないのは、皆がひとりの影だからである。

5 人間の兄弟たちのひとりとして

それではこの機械が、戦争に勝つためだけでなく、武器を持たないユダヤ人を騙して強制収容し、働けるものは「労働による殲滅」を、働けない者は即座に殺害するために動き出したとき、『慈しみの女神たち』の登場人物たちは何を考え、どのような行動を選ぶのだろうか。使いこまれた道具は、あたかも思考を介さずにすませられるかのように、使い手を機敏に導く。善悪の判断が入り込む余地はない。しかし、この小説に描かれた兵卒、ドイツ占領地の協力者、あるいは技術者には、殺人者としての葛藤を語る者も少なくない。

主人公の従卒は、民族ドイツ人とよばれるドイツ系ポーランド人の農民で、実入りのいいSS勤めをして家族に仕送りしていた。ルブリン（レンベルク）出張に同道して大部屋に泊まった彼は、治安警察本部のドイツ人がポーランド女を連れこんで大騒ぎした一夜について、「支払いは缶詰なんです」と言葉少なに語るだけだった（訳書（下）p.46）。ルブリンのドイチェス・ハウスで知り合った男は、専門学校出の農業労働者だが、「毎日、家族に一皿の料理を出すために」（訳書（下）p.56）警官になり、開戦後、安楽死部隊（T-4）に配属された。重症の負傷者を排気ガスで殺害するのが任務だったが、彼は事実を家族に隠し、昇給で妻を喜ばせた。アウシュヴィッツで性的倒錯者になりつつある看守たちを危ぶむ医務室長は、主人公から「信仰はお持ちですか」と訊ねられ、窓の外の焼却場を見つめながら、「かつてはそうだった」と答えた（同p.87）。

しかし、彼らは機械の一部であることを、平時と同じように受け入れている。理由は、それが彼らの職業だからである。日本のテレビドラマで描か

れる戦争も、よく似た構造をしている。それが総力戦だから、それが自分の職業だから、登場人物は平時と同じように機械の一部であることを受け入れて泣いたり笑ったりするが、機械が全体として何をしているかは問わない。ところが、『慈しみの女神たち』では、それが殺人機械であることを知りながら、あえてそこに留まる者がおり、彼の視点で、彼の移動に合わせて物語が展開する。みずからの意思によって殺人機械の一部であることを選んだ主人公マックス・アウエは、ユダヤ人殺害によってキャリアを積んできた親衛隊中佐アイヒマンとも、敵の殲滅を専門とするミュラーとも異なる。生活のために安楽死部隊で働き、「年端のゆかない男も女も、ゴキブリのように踏みつぶす」（同 p.56）デルとも違う。みずから選んだ行動の意味を知る立場にあった彼は、もし赦しがなければ収容所司令ヘスのような運命をたどり、戦後の社会に帰還できないはずだった。主人公は自分の行動をどのように納得し、それを語り手は半世紀後に、どう説明しているのだろうか。

まず、小説の前半「アルマンド I、II」で、主人公は特別出動部隊の上司ブローベル大佐から、ユダヤ人を皆殺しにする命令は、総統自身から出たと知る（訳書（上） p.106）。この「絶滅命令」について別の上司ケーリヒに問い合わせた主人公は、上司が7月にルーツィク（Lutsk）で配置転換を願い出て、いままさにベルリンに戻る準備をしていることを知る（同 p.109）。ところが、主人公は、「もし貴官も辞めたいのなら調整はできる」と親切に促され、しかも「中尉」でなく「博士」と呼びかけられて、「人殺しは人殺し連中にやらせておけばいい」と言われたのに、「わたしは残ります」と答える（同 p.110）。

ドーザが言うように⁽¹⁷⁾、この重要な決定にはジャンルの混同を誘う技巧がこらされて、倫理的判断が棚上げされている。ルーツィクで死体の山を見

て以来（同 pp.84-94）、たしかに主人公は、心身の不調を起こすが、ジトームルまで部隊が進んだ頃は、ひとり静かにプラトンの『国家』を読んでいる。それはアグライオンの息子レオンティオスが、処刑されたばかりの死体を見る欲望と戦いながら、ついに「この素晴らしい光景を心ゆくまで味わうがよい！」と快感に身を任せるくんだりだった（同 p.104）。

そして、主人公は殺人部隊に残る決心をした後、ピアノが得意で将校連の慰めのために生かされているユダヤ人の少年を、「君はいまやヒーヴィー（協力者）なんだ」、大丈夫だと安堵させ、ラモーとクーブランの楽譜を取り寄せてやろう、と約束する（同 p.110-111）。「人殺し連中」、あるいは直訳すれば「肉屋」のもとに留まる決心をした趣味も教養もある将校には、たしかにランズマンが警戒するように「不健康な感情移入」を誘うところがある。あるいは、ヤスパースが戦後のドイツ人に警告したような、「知的で誠実なナチ党员」が感じ取れる。その先を読者が読み進む動機には、おぞましいホロコーストの現場で、この主人公がどこまで「人間らしい兄弟」でいられるか見たい、というものがあるかもしれない⁽¹⁸⁾。

次は小説後半で、主人公が強制収容所のユダヤ人被拘留者を、戦争経済に徹底的に組みこむ任務を帯びるさいの決断である。逆説的だが、主人公のナチ将校は、嘔吐感と闘いながら、みずからの法学博士としての学歴、東部戦線でのユダヤ人虐殺の「功績」、そしてスターリングラードでの名誉の負傷を最大限に利用して出世する普通の人になる。階級が上がり、直属の部下も事務所も貰い、収容所に対する権限も生じる。彼はヒムラーの直命で軍と親衛隊と省庁を暗躍する、一種の情報将校のような存在、つまり「アルバイツアインザッツ [労働配置] 担当ライヒスフューラーSS [親衛隊全国指導者] 特別代表」になる。自分の仕事に誇りを持ち、邪魔者に苛立ち、手柄を認め

させようと躍起になること、まさにアイヒマンと同様である。そんな主人公へのヒムラーの最初の警告は、「感傷家気取りはないだろうな」（訳書（下）p.15）だった。慈悲心を発揮してカタルシスに浸ることを戒められたのである。だが、全編を通して主人公がユダヤ人に感傷的になることはなかった。

とはいえ、主人公マックスは親衛隊のエリートではない。読者は彼が危なっかしく謀略と不透明な戦局を行き来するのを見る。一般に、娯楽小説に描かれる特命工作員は、絶大な力を背景にしつつも、エリートになりきれない弱さや古傷を抱えている。たとえ官僚機構の中で、チェスの名手のように戦うとしても、有力者の手駒として危険な任務を果たすのだから、エリート集団の本流はこの任務を引き受けないだろう。主人公の場合、脆さの根は身体にある。

彼はナチス・ドイツでは犯罪とされた同性愛者である。強制収容所の被拘留者のうち、同性愛者はピンクの逆三角形の認識票を付けていた。また、ユダヤ人の絶滅命令と不可分の仕事をしていながら、かつてウクライナで経験した虐殺の記憶が、時として激しい吐き気と下痢を引き起こす。さらに、休暇中に占領地の南フランスで暮らす実母と義父を訪ね、悪夢のような殺人事件に遭遇し、犯人として二人組の刑事に追われてもいる。小説読者は状況証拠によって殺害が主人公によってなされたと確信できるが、本人に、つまり語り手にその自覚はまったくない。これは刑事に追われる容疑者として致命的である。

また、主人公には学歴と地位を鼻にかけて、刑事の怒りを買うような虚栄心もある。その傲慢さは庇護者であるはずのヒムラーから直接、注意されるほどだった。さらに、精神的に追い詰められた主人公は、性夢を伴うさまざまな幻覚の虜となる。これらの弱点は性格や病理というよりむしろ、身体に

根ざした性質＝自然が、理性の制御を逃れて暴れ出したように読める。だからこそ、『慈しみの女神たち』の語りにおいて、全編で支配的な、過去の自分と現在の自分との距離をよく意識した話法とはまったく異なる、幻想に身を委ねたかのような主題と表現を伴う話法が、ある程度まで物語の必然性を乱さずに現れる。すなわち、スターリングラード戦で頭部を撃ち抜かれた主人公が後方に搬送される時に見た、飛行船と姉の姿がそれであり（『クーラント』末尾）、義父の屋敷で赤軍の襲来を待ちながら見た白日夢がそれである（『エール』後半）。それはあたかも額の傷という第三の目によって幻想的に捉えられた、主人公にしか見えない現実である。そして、この夢想のさなかで恍惚状態にあるマックスが、輸送機上でも、ポメラニアの屋敷でも、あるいは刑事に追われるベルリンの下宿においても、危険に曝されていることは言うまでもない。

したがって、架空のナチ将校マックスのモデルに実在の将校オーレンドルフを挙げるアントワヌ・コンパニョンの推論は、たしかに魅力的だが⁽¹⁹⁾、スターリングラード戦を境にふたりの軌跡が分かれ、互いに反転像になったことも確かなのである。

もともとマックス・アウエは、オーレンドルフとともにイエッセン教授に教わった法学博士なので、後者が親衛隊保安課報部に工員としてリクルートし、次いで帝国保安本部の第三局（内事）で庇護者となった。独ソ開戦後、主人公がクリミア半島で休暇中に、オーレンドルフは辣腕に物を言わせてカフカスの任務に彼を配転させた。オーレンドルフは、結果的に主人公をユダヤ人大量殺害から遠ざけたことになる。ところが、小説後半で、主人公はヒムラーを収容所改善業務の新しい庇護者とし、彼に随行してポーゼン（ポズナニ）に向かうところでオーレンドルフに再会し、かつての庇護者を羽振り

の良さで驚かせる（彼は帝国大臣シュペーアと同じ列車に乗ることになっていた）。同様に、小説後半では、もっとも虚構めいたマンデルブロート博士という謎の大立て者が、これまたポルノ映画から抜け出したかのような妖艶な女性助手らを引き連れて、なにかとマックスを気遣い、さらに旧ドイツ植民地で活躍したとおぼしいレラント氏とともに、彼を徹底した人種政策に巻き込んでゆく⁽²⁰⁾。もはやマックスの関わる時空は、親衛隊から戦時下ドイツの国家機構に活動領域を広げたものの、そのかぎりでは第三帝国と運命を共にすることになるオーレンドルフの及ぶところではない。

このポーゼン旅行の回想においてこそ、『慈しみの女神たち』全編を通じて、主人公がもっとも歴史修正主義的な見解、つまり社会問題の解決のためにナチス・ドイツはやむなくユダヤ人殺害をしたという見解（訳書（下）p.126）を我が物とする⁽²¹⁾。この回想は、わずか一つの文が文庫版で90行を超える（同 pp.124-5）特殊な文体で書かれている⁽²²⁾。

逆説的なことに、マックスは国民社会主義を批判するオーレンドルフから離れ、ユダヤ人絶滅政策の中心人物ヒムラーに就くことで、オーレンドルフを置き去りにして、戦後を生きのびる。後者は、1942年初頭に占領地の主としてユダヤ系の住民14300人を殺害したとしてニュールンベルク裁判で死刑判決を受けた。だが、物語られる戦争末期には、主人公の行く手もまた薄氷を踏むような危うさであり、彼は大臣との週末の狩りから戻って、自分を「頓挫したら溶けてなくなるヒューズ」（同 p.162）に喩えている。ふたつの反転像は、ともに死と隣り合わせである。親衛隊の法学博士が合わせ鏡になっている。

6 虚構に倫理を問う——結論に代えて

このように殺人者を繊細な壊れ物のように描くことで、リテルはあまりに特殊な人物を主人公とする虚構に、倫理的問いを見出しがたくした。主人公の罪は運命のように感じられて読者の倫理的判断を棚上げさせ、強い情動によって思考は鈍りがちになる。しかも、小説の題がアイスキュロスの戯曲を連想させるので、物語は精神分析的な主題を神話的次元で扱ったものになってゆく⁽²³⁾。この次元において、すなわち主人公に取り憑いた夢想において、彼は姉の愛人、母の殺害者である。彼には600万人のユダヤ人の死よりも大切な謎があり、読者がその解説に知的興奮を覚えるとすれば、ホロコーストの物語は、フロイトのファミリーロマンスという意味での陰惨な家族小説へと、ジャンルの移行を果たす。

しかも、このギリシア神話の見立ては、倫理に対する小説の態度を決定している。戦後を生きのびた語り手は、オレステス＝マックスの罪が現代人のように問えないことを、安楽死部隊の男に即して次のように公式化する。読者はそこまで行かねば『慈しみの女神たち』を理解できないが、そこから引き返せなければ、ナチ将校の罪を論じられまい。

「そこでは自分の意志に何の価値もなく、自分が英雄もしくは死者というよりむしろ暗殺者になったのが偶然のなせる業だと承知しているのだ。あるいは、それならこうした事態は、もはやユダヤ＝キリスト教の倫理の見地からではなく（また結局は厳密に同じことになる世俗的で民主主義的な見地でもなく）、ギリシア的倫理の見地から考察すべきである。」（訳書（下）pp.58-59）

神は許すことができるか？ユダヤ＝キリスト教の神はどうか？古代ギリシアの神々ならば？と語り手は暗黙のうちに問いながら、国家と国民の責任を次第に曖昧にしてゆく。

翻訳者の使命とは、作者リテルがフランス語で書かれた小説に期待した物語の神話的、精神分析的広がりにおける展開を、それとは別の広がりを持つ日本語で展開させることである。もしそれに成功すれば、主人公のナチ将校は、自分も同じ境遇にあればそうになっていたかもしれない、という殺人をなすうる可能性の次元で語られるのではなく、少なくとも読んでいるあいだは、読者自身もそのような境遇にあると感じられたもうひとりの自分として、潜在性の次元でリアリティを獲得するだろう。読んでいるあいだは、わたしたちもマックス・アウエである。あるいは、少なくとも、死を覗きこむ誘惑に負けたアグライオンの息子レオンティオスである。本論冒頭に掲げた国際シンポジウムで発表し、またリテルとクリステヴァを招いた討論会を主催したジャン＝シャルル・ダルモンによれば、「現実」と「ファンタスム」のあいだで揺れる読みの経験を通して、「毒をもって毒を制するホメオパシー（類似療法）」⁽²⁴⁾がなされる可能性がある。ならば、わたしたち読者は、虚構の読みを通して体内に取りこんだ毒に対するように、潜在性の次元の悪と向かい合う。実践の学としての倫理が、その後で意識されることを期待しよう。

註

- (1) Jonathan Littell: *Les Bienveillantes*, Gallimard, 2006; 改訂新版 folio, 2007 ゴンクール賞の有力候補作となった2006年10月、同書はすでに17万部を売り上げ、在庫切れまで報じられて、一種の「現象」となった。ブルターニュ地方の書店主や読者の声をまとめた「ナチのおぞましが売れ行き好調」という記事もある。そし

て、母語でないフランス語で長大な小説を書き、当時はバルセロナに家族と住んでマスコミを嫌ったりテルは、ダニエル・マルタンに語った「わたしは作家ではない」という言葉とともに、文学賞争いを高みで見下ろす特異な存在となる。結局、同作はゴンクール賞とアカデミー・フランセーズ文学大賞を「W受賞」した。Gaël Le Saout: «*Les Bienveillantes*. Lecture d'un phénomène», *Le Télégramme*, 15 octobre 2006; Daniel Martin: «Littell, si peu gensdelettres» *Centre France*, 15 octobre 2006

- (2) 菅野昭正、星屋守之、篠田勝英と共訳。集英社から2011年5月に刊行。
- (3) オレステスになぞらえられた主人公は、実父を失踪者として事実上、抹殺してしまった母と再婚相手のモローを、アガメムノンを殺したクリュタイムネーストラとアイギストスのように憎んでいた。双子の姉ウナは、共訳者の菅野昭正が「訳者あとがき」と評論「悪の迷路の果てに」で指摘したように、エレクトラに見立てられた両性具有の自分自身である。菅野昭正「悪の迷路の果てに—ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』をめぐって」『すばる』2012年8月号・9月号
- (4) 「平和と和解の研究センター」主催「大規模暴力の語り方—日仏学際対話の試み」(代表 中野聡)
- (5) 討論会はパリの高等師範学校が主催し、同校のホームページから閲覧できる。参加者は作者の他にパリ第7大学のクリステヴァ、国際人権団体に関わり、また作者と同様にユダヤ系でもあるロニー・ブローマン、そして主催した高等師範学校からジャン＝シャルル・ダルモンが文学と倫理の関係について発言した。ダルモンと本論筆者は、註(4)のシンポジウムの同じセッションで議論があった。
- (6) 『慈しみの女神たち』原作は2006年9月に出版された。作者リテルは出版の1ヶ月半前に、フロラン・ジョルジュスコのインタビューに応じている。そのかなりの分量の抜粋が、『フィガロ・マガジン』に2006年12月末に転載された。また、出版直前の2006年8月末、ジェローム・ガルサンは作者にパリで会い、『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』に長文の記事を寄せた。なお、ガルサンの記事は作者リテルが事実と反するとジョルジュスコに注意した「小説第一作」を釣り文句とし、英語のlittleと掛けて「リテルは偉大」と見出しを付けるなど新人扱いが著しいが、その分、読者が知りたいことを作者の言葉を引きつつ書いている。Florent Georgesco: «Entretien avec Jonathan Littell», *La Revue littéraire*, Editions Léo Scheer, repris in *Figaro magazine*, 29 déc. 2006; Jérôme Garcin: «Littell est grand», *Le Nouvel Observateur*, 24-30 août 2006, pp.92-95 これらによるとリテルは1967年、

ニューヨークに生まれたアメリカ人で、3歳の時にフランスに移住。帰国後も13歳から16歳までフランス人学校（リセ・フランセ）に通ってフランスの大学入学資格（バカロレア）を取得した。アメリカのイェール大学で芸術、文学などを雑多に学びながら19歳か20歳でSF小説を出版したが反響はなく、21歳から25歳まで文学翻訳を試みてモーリス・ブランショ、ジュネ、サド、パスカル・キニャールなど『慈しみの女神たち』とも関連する作家たちの作品や手紙を訳したが、これも日の目を見なかった。1993年暮れ（26歳）に旅行者としてサラエヴォ滞在中、人道支援団体 Action contre la Faim（反飢餓行動）に現地採用され、以後7年間その団体に働いた。小説執筆はその後ということになるが、構想はずっと以前からあったという。

- (7) インタビューを総合すると、本格的な執筆は、物語の骨子にアイスキュロスの「オレスティア三部作」を据えようと思いついた1998年に始まる。だが、資料収集と読書に数年を要した。もっとも、リテルは聞き手のジョルジュスコに答えて、ナチ将校を主要登場人物にするというアイデアはそれ以前に、当初からあったが、人道支援団体に、いわば戦争の渦中において、物語を「絶滅の官僚的側面」に向けて発展させたくなったという。完成作では、主人公が親衛隊全国指導者ヒムラーの特命で、強制収容所の効率化に取り組む後半の『メヌエット』が「官僚的側面」に相当する。この章の副題である「ロンドー形式で」は、主題再現を特徴とする舞曲であるから、前半で登場していたゲシュタポ「ユダヤ課」のアイヒマンや、主人公をカフカスでの諜報活動に誘ったオーレンドルフとも印象的に再会する他、アウシュヴィッツのガス室が、東部戦線での銃殺や一酸化炭素中毒によるガス殺と比べて、工業的かつ能率的である点が、収容所司令ヘスおよびメンゲレ医師によって強調される。こうして物語の全体が、ナチ将校による「絶滅の官僚的側面」を踏破する旅の様相を呈している。フランソワ・レオタールは地方誌『コルシカ』の連載時評で、「あの巨大な死の行政機構のちっぽけな網の目」にすぎない男の視点から、900ページに及ぶ「想像の、また本物の」物語を作った作者の独創性を称える。François Léotard: «Vive la rentrée? Vraiment?», *Corsica*, octobre 2006
- (8) 作品のライトモチーフとなったのは、独ソ戦のさなか、モスクワ近傍でナチに処刑されて雪の中に倒れ、乳房を犬に食われた半裸の女性バルチザンの写真とされる。ジョルジュスコに語ったところでは、リテルは1980年代末の大学時代にこれを見て衝撃を受けた。ガルサンに語ったところでは、人権団体「反飢餓行動」

の職員としてボスニア、北カフカス、アフガニスタン、ルワンダなどで内戦を経験した後、2001年に各種団体のコーディネーターを務めていた頃に見たことになっている。18歳で死んだこの女性はゾーヤ・コスモデミヤンスカヤといい、死後に女性初のソ連邦英雄称号を受け、スターリン時代にヒトラー・ドイツに対する抵抗のシンボルとしてプロパガンダに利用された。『慈しみの女神たち』（訳書（上）pp.179-180）には、この女性が相当の脚色を経て登場する。主人公マックス・アウエがSD（保安課報部）の一員としてハリコフに居たとき、パルチザンの女性がドイツ人らの見物する中で絞首刑に処せられた。国防軍の将兵、治安警察官、トート機関の職員、東方省の役人らは、吊るされる前の彼女に一人ずつ接吻していた。主人公は激しい衝撃を受け（「わたしは焼け落ち、残骸は塩の柱に姿を変えろ」）、次いで作者が写真で見た光景を目撃する。ロープが切れたのか、娘の死体は公園の雪の中に横たわり、はだけた片方の乳房が犬に齧られていた。主人公は、その姿を「雪の聖母」と名づけ、その後数週間、道すがら横たわる彼女を幻視することになった。

- (9) 作者リテルが『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』のガルサンに語ったところでは、「わたしの小説の源には、<ユダヤ人の破壊の問題を問うということは、ドイツ人の問題を問うことだ>というラウル・ヒルバーグの文章がある」。そして、映画『ショア』の監督ランズマンについては、「24歳でそれを見た時、根底から揺さぶられた。私はこの映画によって、ジェノサイドの官僚機構について書こうと決めた」。このようにリテルは『慈しみの女神たち』を書く契機を、必ずしもパルチザン女性の死体写真だけに求めている。
- (10) 訳書（下）p.39 訳書からの引用は本論中に示す。大久保和郎訳『イエルサレムのアイヒマン―悪の陳腐さについての報告』みすず書房、1969年。原著の副題は A report on the Banality of Evil
- (11) フランスでは歴史家、文芸批評家によるおおむね批判的な『慈しみの女神たち』論が原著出版の翌年に相次いだ。「総統による絶滅命令」についての参照ページを示す。Pierre-Emmanuel Dauzat, *Holocauste ordinaire, histoires d'usurpation, extermination, littérature, théologie*, Bayard, 2007, p.63; Edouard Husson et Michel Terestchenko, *Les Complaisantes Jonathan Littell et l'écriture du mal*, François-Xavier de Guibert, 2007, pp.34-37
- (12) 物語は主人公マックスが事態の傍観者になるように推移する。註（8）で見た未成年の女性パルチザンの処刑と「雪の聖母」の幻覚（訳書（上）pp.179-180）を

経て精神的にダメージを受けつつあったマックスは、ハリコフで従卒の少年兵ハニカが現地の子どもの持っていた爆発物で死亡すると（同 p.184）、上司ヴァインマンのはからいで極寒のハリコフから「数週間後には海水浴もできる」（同 p.185）クリミアで療養することになる。偶然、そこで再会した親衛隊における庇護者オーレンドルフから、「ユダヤ浄化」とジブシーの抹殺について事情を聞いた（同 p.208）マックスは、カフカス方面に転属させてもらうことになる。そこで彼がギリシア語を話す不思議なユダヤ老人を、みずから処刑することになっても、観照の結果、みずから手を下したおぞましさが、絵に描かれた凄惨さに転じることは否めない。註（11）に挙げた研究書の他に、特に次の批判は説得的である。François Meyronnis: *De l'extermination considérée comme un des beaux-arts*, Gallimard, 2007

- (13) 文芸批評は概して好意的であった。原作の初期受容として、独ソ戦を主人公の敵の側から描いたヴァシリー・グロスマンに言及したボル・ヴァンドローム、トルストイの『戦争と平和』やショーロホフの『静かなドン』、そして同じくグロスマンの『人生と運命』などの名を挙げてロシア小説との類縁性を言うとともに、主人公がたえず自己を正当化しようとしてイデオロギー的の主題を作品に持ちこんでいると指摘するドミニク・フェルナンデス、実際に作者に会ったジェローム・ガルサンの批評が参考になる。Pol Vandrome: «*Les bienveillantes de Jonathen Littell*», *Les Cahiers de la Semaine*, 12 octobre 2006; Dominique Fernandez: «Un nouveau Guerre et Paix», *Le Nouvel Observateur*, 24-30 août 2006; Jérôme Garcin: «Littell est grand», *op. cit.*
- (14) 註（4）のシンポジウムにおけるダルモンの発表による。原文は «un phénomène d'empathie malsain» 発表の題名は «Représentations de la violence et éthique des genres littéraires: des *Bienveillantes* de Jonathan Littell à la critique libertine de la *catharsis*» 日本語に訳せば、「暴力の表象と文学ジャンルの倫理—ジョナサン・リテルの『慈しみの女神たち』からリバルタンによるカタルシス批判まで」となる。
- (15) Robert Merle, *La mort est mon métier*, Gallimard, 1952 引用はモデルがヘスであることを作者メルルが序文（1972）で明かした folio 版
- (16) ルドフル・ヘス『アウシュヴィッツ収容所』片岡啓治訳、講談社学術文庫、1999年
- (17) Dauzat, *op. cit.*, pp.62-66
- (18) ランズマンは『慈しみの女神たち』について、「好意的」だったが、本文の「ヒルバークと自分だけが理解できる」という言葉遣いの「虚栄心」に反発している。

Claude Lanzmann, *Le Lièvre de Pagagonie, Mémoires*, Gallimard, 2009, p.485

- (19) Antoine Compagnon: «Nazisme, histoire et féerie: retour sur *les Bienveillantes*», *Critique*, No 726, nov. 2007, p.885
- (20) 小説の結末近くで主人公マックスは、美貌の女性助手らをすべて殺害してロシア軍の迫り来るベルリンの事務所を引き払おうとしているマンデルブロート博士とレラント氏に会う。後者は、「《総統》が始めた存在論的戦争は終わっていない。スターリン以外の誰がその仕事を成しとげることができるだろうか?」(訳書(下) p.402)、と社会問題の根本的解決としての大量殺人という持論が、ソ連に引き継がれたことをほのめかす。付いてくれば優遇するという誘いに主人公の返事は、「あなたがたはみんな狂っている!」(同 p.403) だった。架空の人物マックスは、まさに実在のオーレンドルフとは異なる物語の住人である。
- (21) Compagnon, *op. cit.*, p.884 ライヒスフューラー(全国指導者) SS ヒムラーは1944年10月6日夕刻に、帝国部局長と大管区指導者に向かって演説し、ユダヤ人絶滅が総統の意志であり、参集した誰もがその責任を逃れえないことを納得させた。この箇所、マックスはヒムラーの意図を読者のために祖述しようとしている(「これらの考察を、あなたがたが興味深く読んでくださる気がしてならない」訳書(下) p.128)。
- (22) 文体を論じる紙数はないが、訳者のひとりとして、ぎっしり書きこまれたこの小説にあっても、主人公がナチの絶滅政策について釈明するさいに典型的に、こうした切れ目の無い文が現れるという感想を述べてもいいだろう。それは作者が、多くの異なる人物から発した主張を、ひとりの話者に語らせようと、文にアクロバットのな姿態をさせているからだと言えるが、他方で、もしこれが最終解決の釈明であるとするれば、そこには裁判官も検事もおらず、対話はおろか尋問に応じる気配さえ感じられない。唯一の例外が、スターリングラードで捕虜にした赤軍連隊付きの政治委員と主人公マックスが、敵と識別するのにナチは人種(「ユダヤ人、ジプシー、ポーランド人、そしてどうやら精神病患者」)、ポリシェヴィキは階級(「クラーク、ブルジョワ、<党>の偏向分子」)を使うだけで「イデオロギーの機能の仕方が似ている」と、互いに自分たちの所業を釈明する長いくだりであろう(訳書(上) pp.371-379)。この対話は半年以上を経て、主人公が小説後半の語るアウシュヴィッツ絶滅収容所視察の後、「ポーランドで自分の見たことについて思い巡らし」ながら、ロシア語とドイツ語とで死を語る語彙の違いについて思いあたり、「最終解決」「移送済み」「執行措置」などの婉曲語法について

考察する長い文と響き合う（訳書（下） pp.92-93）。

- (23) 註（3）参照。メルシエ＝ルカはアイスキュロスの「オレステス三部作」と小説を比較検討している。この評論を取める『デバ』誌の『慈しみの女神たち』特集は、作者リテルのインタビューを2本収め、初期受容が註（11）の研究書とともに第二段階に入ったことを跡づける。Florence Mercier-Leca: «*Les Bienveillantes* et la tragédie grecque. Une suite macabre à L'Orestie d'Eschyle» *Le Débat*, mars-avril 2007, No. 144, pp.45-55
- (24) シンポジウムの発表による。註（14）参照。